

## 生活福祉保健委員会記録

- 1 期 日 令和4年8月19日(金)
- 2 場 所 第3委員会室
- 3 出席委員 委員長 高田 稔  
委 員 畑石顕司、渡辺典子、窪田泰久、山下智之、田川寿一、  
中原好治、犬童英徳、宇田 伸
- 4 欠席委員 副委員長 灰岡香奈

### (5) 質疑・応答

質疑(田川委員) 私からは1点だけ、带状疱疹予防ワクチンについて質問させていただきます。今、コロナの課題対策が優先ということは分かっていますが、ぜひ知っていただきたいということで、質問をさせていただきます。

带状疱疹は、もともと子供のときにほとんどの皆さんが水ぼうそうにかかると思いますが、体内に残っているこの水ぼうそうのウイルスが再活性化することによって発症すると言われております。皮膚が水膨れになるなど、夜眠ることもできないぐらいの激痛が走るとも言われておりまして、大変深刻だと聞いております。50歳から80歳までの年齢の間に3人に1人が大体発症するというデータがありまして、そうすると、まさに50代の働き盛りのときにこの带状疱疹が発症することがあり得るわけです。その原因というのは、加齢であったり、ストレスであったりと言われておりますので、少なからず多くの方々がこの带状疱疹にかかっている、今からかかるかもしれないという状況であることをまず知っていただきたいと思っております。

実はこれを防ぐワクチンが最近では認められています。ですから、この予防ワクチンをきちんと接種していれば、こういう苦しみに遭うことがないということだろうと思うのです。これは初期治療でかなり治療できるのですけれども、実はその後、合併症や、後遺症で苦しむ人がいて、その医療費も大変高額であると言われております。これに対しては、何らかの対策が必要だろうと思うのですが、まず、この予防ワクチンがあるということ、これを多くの県民の皆様に周知徹底をすることが大事ではないかと思うのです。ワクチン接種をしていけば、防げるわけですから。ただ、非常に高額なので、例えば一部でも自治体の補助があれば、受けようと思う方もいらっしゃるのではないか、そういう方向に誘導できるのではないかとと思うのですけれども、まず、県民への周知ということと、それから、県としてこの補助をどう考えているのか、お伺いしたいと思います。

答弁（感染症対策担当監） 高齢化が進む中、加齢などによって発症リスクが高まり、長期にわたる治療が必要な帯状疱疹を予防することには意義があると考えております。帯状疱疹ワクチンは、帯状疱疹の発症率を低減させ、重症化を予防するとともに、間接的に帯状疱疹後神経痛の発症リスクを低減させるものとして、従来、小児に用いられている水痘ワクチンについて、平成28年3月に、50歳以上の者に対する帯状疱疹の予防化、効能・効果に加わりました。また、平成30年3月に海外製の乾燥組換え帯状疱疹ワクチンも承認されてきたことから、予防ワクチンについて、ホームページ等を通じて周知してまいります。

それから、助成についてですけれども、帯状疱疹を発症しますと、本人にとっては生活の質が低下するなど、影響が大きい一方で、人から人への感染予防を主とする他のワクチンとは少し異なっているということから、他県状況等を把握しながら、接種しやすい環境づくりに向けて検討を行ってまいります。

要望・質疑（田川委員） 今説明がありましたけれども、ぜひ県民への周知に努力していただきたいと思います。

それから、もう一つ、今説明の中にも出てきましたけれども、帯状疱疹後神経痛というものがあまして、これは大体2割ぐらいの方が後遺症で苦しむと聞いております。この医療費が1人当たり大体12万円強かかると言われておりまして、国全体で見ると、この医療費だけで260億円ぐらいかかっていると言われております。ですから、この医療費を抑制するというのも大切ですし、自治体として、すぐ補助や支援ができないのであれば、国に対してこの補助を訴えていくことも県として必要ではないかと思っております。いま国でも検討されているそうです。働き盛りの方の労働生産性を上げるということ、それから、高齢者の方の健康維持管理をしていくという意味でも大切だろうと思っておりますし、今言った医療費の抑制ということを考えても、ぜひ国への働きかけをお願いしたいと思うのですけれども、これについてはいかがでしょうか。

答弁（感染症対策担当監） 委員御指摘のとおり、現在国において帯状疱疹ワクチンを予防接種法に基づく定期接種とすることの是非について検討が行われておりますので、国の状況を注視してまいりたいと思っております。

要望（田川委員） 国も今検討しているので、積極的に県からもアピールをしていただきたいと思っております。ぜひよろしく申し上げます。